

京都大学教育研究振興財団助成事業
成 果 報 告 書

平成27年9月11日

公益財団法人京都大学教育研究振興財団
会 長 辻 井 昭 雄 様

所属部局 地球環境学堂

職 名 教授

氏 名 籠 谷 直 人

助成の種類	平成27年度・研究成果公開支援・国際会議開催助成		
事業内容	(和文)近代アジアの植民地港湾都市を起点とした社会経済的変容とその相克 (英文) Complexity of Innovative Colonial Milieu: Socio-Economic Transformation in the Colonial Ports and their Hinterlands in Modern Asia, 1850s-1940s		
開催期間	平成27年8月9日 ～ 平成27年8月10日		
開催場所	京都大学 人文科学研究所		
参加者	総数 33名	内訳 初日(8月9日) 16名 2日目(8月10日) 17名	
成果の概要	タイトルは「成果の概要／報告者名」として、A4版2000字程度・和文で作成し、添付して下さい。「成果の概要」以外に添付する資料 <input checked="" type="checkbox"/> 無 <input type="checkbox"/> 有()		
成果の概要	事業に要した経費総額	855,152 円	
	うち当財団からの助成額	855,152 円	
	その他の資金の出所	(機関や資金の名称)	
	経費の内訳と助成金の使途について		
	費 目	金 額 (円)	財団助成充当額 (円)
	旅費・交通費(海外2名、国内1名)	804,410	804,410
	会議中の飲物・茶菓類(2日分)	21,200	21,200
	会議用印刷費	19,961	19,961
会議用文具類(ノート、ペン等)	9,581	9,581	
当財団の助成について	(今回の助成に対する感想、今後の助成に望むこと等お書き下さい。助成事業の参考にさせていただきます。)		

●実施概要

研究代表者：籠谷直人

所属部局・専攻・職名：京都大学 地球環境学堂 教授

国際会議タイトル：

(英文) Complexity of Innovative Colonial Milieu: Socio-Economic Transformation in the Colonial Ports and their Hinterlands in Modern Asia, 1850s-1940s

(和文) 近代アジアの植民地港湾都市を起点とした社会経済的変容とその相克

開催場所：京都大学 人文科学研究所

会議開催期間：平成 27 年 8 月 9 日 ～ 平成 27 年 8 月 10 日

国際会議組織者：籠谷直人 (京都大学 (日本)・日本経済史)

共同組織者：大石高志 (神戸市外国語大学 (日本)・インド近代史)

●プログラム (実施版)

First Day (10:00-17:30):

Orders and Infrastructure in the Colonial Ports, to be chaired by N. Kagotani

Naoto KAGOTANI (Kyoto Univ.)

Title: Introduction & The Opening Remarks: Forced Free Trade by the West and Asian Merchants' Networks

Mark METZLER (Univ. of Texas)

Title: Asian Port Cities in the International Economic Crisis of 1865–1866

Simon BYTHEWAY (Nihon Univ.)

Title: The Opening of Yokohama: the "Great Inflation", Currency Crises, and Diplomatic Failure

Ryota ISHIKAWA (Ritsumeikan Univ.)

Title: Trade Settlement System of Chinese Enterprises between Shanghai and Incheon in the Late Nineteenth century

Susumu MIZUTA (Hiroshima Univ.)

Title: Dry Docks and Patent Slipways of Maritime Asia

Ryuichi TANIGAWA (Kyoto Univ.)

Title: Hydropower Development and Chemical Industrial City "Hungnam"

Discussants:

Takeshi Nishimura (Kansai Univ.)

Tomotaka KAWAMURA (Kyoto Univ.)

Second Day (10:00-17:30):

Socio-Economic/Cultural Transformations, to be chaired by T. Oishi

Takashi OISHI (Kobe City University of Foreign Studies)

Title: "Traded Goods and the Socio-Economic/Cultural Transformations in Asian Intra-regional Context: The Cases of Ornaments and Matches in Modern India"

Lisa TRIVEDI (Hamilton College)

Title: "Business Innovation in an Anti-Capitalist Movement: Gandhi's Swadeshi movement, 1920-1947"

Srirupa PRASAD (University of Missouri)

Title: "Beyond Utilitarianism: William Butler and the American Methodist Mission in Mid-Nineteenth Century India"

Madhulika BANERJEE (University of Delhi)

Title: "Encounters Of Knowledge And Economic Systems: The Making Of Ayurvedic Medicines In Early Twentieth Century India" *御本人と母上の病気/体調不良によりキャンセル

Tomo ICHIKAWA (Nagasaki Univ.)

Title: "Disease Exchange and Treaty Ports: History of Maritime Quarantine in Meiji Japan"

Kensuke HIRAI (Konan Univ.)

Title: "From Wiping to Bathing: Demand for Soap in Colonial Taiwan"

Discussants:

Setsuko SONODA (University of Hyogo)

Kohei WAKIMURA (Osaka City University) : 不可避の事情によりメール通信でのコメント

●英文概要（当日配布版）

Colonial ports in modern Asia, including the so-called treaty ports, unquestionably worked as the bridgeheads of colonial rule to infringe upon the authority, sovereignty, and economic self-reliance of the existing regional polities. Some recent historical works, however, have been energetically illuminating and emphasizing socio-economic transformation and cultural innovations that utilized new infrastructure and intra-regional order/networks of commerce, finance, migration, and information provided by the colonial ports.

While this international workshop is to be composed of examples and case-studies with specific references to colonial port cities in Japan, China, India and other parts of Asia offered from specialists and researchers based in Japan and abroad, it will as a whole discuss two key questions below so as to explore "complexity of innovative colonial milieu":

- To what an extent did socio-economic/cultural transformations in these port cities and their hinterland provide the spaces for the creations of openness and public order?
- What sort of constraints and regulations of colonialism persisted within the socio-economic/cultural

transformations?

This workshop thus focuses upon the ambiguity and complexity, in which these two mutually contradictory aspects co-existed in the historical contexts of the port cities and their hinterlands in Modern Asia.

The significance of this international workshop is twofold: firstly, it highlights the interface of politics and culture, while focusing mainly upon economic activities in the port cities and their hinterlands. For this purpose, attentions are duly drawn to highly concrete historical facts and themes connected to such multifaceted nature of colonial milieu in modern Asia. Secondly, it widens the research scope so far limited to specific port cities or regional spaces. Bridging the case studies of ports and regions, this workshop aims to examine the interconnected histories of Asian port cities on the macro-spatial zone stretching from India to Northeast Asia as well as secure the inter-regional comparative perspective in analytical methods. The time span is the century of empires and wars, from the 1850s to the 1940s.

The focus is to include Shanghai, Taipei, Kobe, Yokohama, Incheon, Singapore, Calcutta, Bombay in regard to ports, and banking, architectures, clothes, fashion goods, medicines, sanitation, for topics.

●成果とその学術的意味

地域と学問領域における越境

本国際ワークショップでは、日本を含む東アジアで欧米等の要求に応じて「開港」の舞台となった条約港を含めて、広く近代アジアで、植民地支配や政治・経済的覇権の行使の起点となった港湾都市とその後背地を取り上げて、それらに投下された技術やインフラ、制度、商品、規範などを再検証することを通じて、植民地主義や帝国主義の規定性とそこから派生的に生み出された「革新性」の両面の拮抗と相克に焦点を当てることを主眼にした。

幸いにも、個人の研究として、これまでにこうした研究課題に潜在的に関わりを有してきた研究者に、本ワークショップに参加したことにより、こうした共通の研究課題に正面から向き合うことが出来た。とりわけ、東アジア史（日本史）と南アジア史や東南アジア史という、普段は、相互の交流の少ない領域の研究者が、1つの場で論点の共有を行うことが出来たこと、さらに、経済・金融史、建築・技術史、社会・文化史という、相当程度、前提が異なる研究基盤の出身者が、それぞれの最新の研究成果の突合せを行うことが出来たことにより、本ワークショップは、学問的な交流、交差、越境の面で、大変貴重な機会となった。

規定性、機動性、革新性

植民地港湾都市が、植民地支配や外的覇権の相当の規定性の下に置かれたうえで、近代アジアにおける地域の政治的な主権や経済的な自立性を侵食する起点となり、内陸を含めた植民地支配の前提になったこと自体は、否定できない。しかし、今回のワークショップに参集した国内外の研究者と彼等が推し進めてきた昨今の新しい近代史研究は、植民地港湾都市に確保された物流や金融、人的移動、情報提供などの新しいインフラや、それらから紡ぎ出された広域秩序やネットワークなどに着目することにより、植民地港湾都市を媒介とした社会経済的な機動性や文化的な創造性を、解明・強調する取り組みを精力的に行ってきた。

今回のワークショップでも、こうした新しい研究を敷衍するかたちで、極めて高い具体性と現実性を伴うかたちで、歴史的な事象と事例が、個別報告によって示された。たとえば、

通貨・物流システム（籠谷報告；メツラー報告；バイスウェー報告）、船舶修理ドック（水田報告）、水力発電施設（谷川報告）、電報・電信施設（石川報告）、伝染病検疫施設（市川報告）、衛生概念・規範（平井報告）、キリスト教人道主義（プラサード報告）、近代技術を伴う商品（大石報告；トリヴェディ報告）である。

諸報告では、強調点などに様々な相違こそあれ、こうした制度や文物、規範が、確実に植民地主義的な文脈に資するものであり、そうした意味での制約や規定性は背負いつつも、その実、ある種の「公共財」的な性格を帯びて、広域的な物流、地域産業基盤の形成、社会文化的な動態（改革運動など）などを派生的に誘発し、地域社会に社会的、経済的、文化的な機動性を提供したことが、示唆された。この意味で、近代アジアの経済・社会・文化における革新性や能動性、創造性の一部は、確実に、こうした植民地港湾都市を起点として展開されていったことになる。

ただし、こうした革新性、能動性、創造性が、植民地主義と切り離されて展開されたのではないことが強調されたことも、重要であろう。たとえば、投下された技術や商品は、それ自体が自律的に作用・展開していったわけではなく、それを取り巻く制度や規範によって、制約や社会的意味を付されつつ、媒体として援用されていった。こうした点にも、本国際会議が念頭に置いていた、革新性と規定性との相克的な拮抗を、あらためて、具体的な歴史事象の中に確認することができた。

アジア諸地域間の有機的連関とダイナミズムの歴史的探求へ

結果的に、本国際会議では、植民地港湾都市を起点とする地域社会の変容や動態の誘導者として、従来から重要性を認知されて研究対象となってきた植民地政府当局や欧米起源の国際的事業者・企業、お雇い外国人技術者などよりも、むしろ、日本人やインド人、中国人などのアジアの商人や技術者などに中心的な焦点を当て、その重要性を指摘することになった。つまり、彼等は、植民地港湾都市に提供された技術やインフラ、規範、商品などを、修得・取得し、そこに新たな利用・援用や意味付けの可能性を見出しながら、更なる新しい展開を実現していった媒介的な存在であった。例えば、神戸や横浜のような日本の条約港とその後背地に投下された近代西欧由来の新技术や商品は、日本人の技術者や事業者、さらに、滞留していた中国人やインド人の商人の手を介して、新しいアレンジや補完、意味づけを施されながら、もう一度、アジアの別の地域へ、転用・展開されていった。こうした媒介と新しい展開によって、広域アジアに、西欧とアジアという単線的な関係性に必ずしも収斂されない、複合的で有機的な関係軸が紡ぎ出されていったことになろう。本国際会議は、こうした広域的なダイナミズムをさらに共同研究等を通じて探求することの重要性を、あらためて共有しながら、閉幕した。